

J・S・ハクスリーの進化論的ヒューマニズム教育論 の思想と実践

著者	笹原 英史
号	11
学位授与番号	105
URL	http://hdl.handle.net/10097/37128

ささ はら ひで ふみ
笹 原 英 史

学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 番 号	教 第 105 号
学位授与年月日	平成 15 年 7 月 16 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
最 終 学 歴	昭和 63 年 3 月 東北大学大学院教育学研究科博士課程後期 3 年の課程退学
学位論文題目	J・S・ハクスリーの進化論的ヒューマニズム教育論の思想と実践
論文審査委員	(主査) 教 授 宮 腰 英 一 教 授 水 原 克 敏 教 授 加 藤 守 通

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的はハクスリー（Julian Sorell Huxley、1887－1975）の進化論的ヒューマニズム（Evolutional Humanism）の全体像を明らかにし、その教育論の特徴と影響、実践の経緯を明確にすることである。このためには先行研究に欠落している四つのテーマを扱うことが必要であると考えた。第一に思想形成の契機になった植民地教育への関与の実態と意義を明らかにすることである。第二に思想構築の方法論、構築された諸論、とくに教育論の特徴を明らかにし、その独自性を検証することである。第三に、それが他の教育思想に及ぼした影響をモンテッソーリを中心に明らかにすることである。第四にユネスコにおける実践の実態を明確にし、その功績を評価することである。

研究方法としては、第一にハクスリー自身の著作と関連の二次的文献の分析を中心に、生物学・進化思想史、イギリス・アフリカ史関係文献を参照しながら思想形成の経緯と時代的背景を明らかにし、アフリカ植民地での経験の実態と意義を検討した。また思想構築の方法論に見られる特徴的な理論、構築された国家・社会論や宗教・道徳論を分析したうえで、教育論の体系的把握とその特徴の検討を行った。第二にモンテッソーリの著述の分析によって、彼女の教育思想の根底にある世界観への影響を具体的に示した。またユネスコ関連議事録や文書の分析によって彼の発言や活動の実態を明らかにし、その功績の評価を試みた。本論の概要は以下の通りである。

第一部では、まず基礎作業として分野別著作数の動向の分析、思想の形成や展開に影響した研究や社会的活動を検討し、とくに植民地教育への関与が後の植民地開発論やユネスコ教育政策論の形成に不可欠な役割を果たすとともに、ユネスコ基礎教育政策の基本方針を決定づけたことを示した。また非階級的で民主主義的な学校制度、個の発達の保障と独自の文化を尊重する教育内容など、この経験にもとづいて組み立てられた理論が進化論的ヒューマンイズムの教育論の一部を形成したことを指摘した。また、大衆化と科学・技術の進展が思想の時代的背景の二大潮流であったこと、トーマス・ハクスリーらの家族や受けた教育が、彼のメンタリティや問題意識の形成に大きく影響した事実を指摘した。

第二部では、まず「進化」を全事象を包括する単一の時空間と規定し、いっさいを進化論の対象にするという独自の方法論、進化を「進歩」が生起する過程と再定義することで、進化の「支配人」たる人類の地位と責務を生物学的事実として正当化するという特徴的な論理の展開を明らかにした。つづいて宗教・道徳論のなかで、彼が科学的信条とヒューマンイズムに立脚する新しい信仰対象と道徳的規範を求めたことを明確にした。次に進化論的アプローチによって教育が伝統や文化の伝達と変換と定義され、自己の可能性を最大限に発現させた「充足した個」が教育目標の人間像として提起されていることを明確にした。それにもとづいて教育の民主化や成人教育の充実が提言され、それらが当時の教育を現代的方向へ導き、推進したことを明らかにした。また「進化」中心の教科統合、系統主義と経験主義、教科と教科外活動、知育と徳育、知識と行動を統合するカリキュラムに関する提案が、例えば体験的・総合的活動をとおして自発的・積極的な学習を促し、主体的な問題解決能力や自己学習力の育成をめざすという現代教育の目標にとって有効な事例を提供していることを示した。そして新しい進化生物学の観点から教育的人間像と教育のあるべき姿を提起する試みとして、彼の教育論を評価した。モンテッソーリへの影響については、教育思想の基盤にある人類の地位と責務に関する見解、全人類の調和と共存を重視するヒューマニスティックな世界観が、彼の発生的知見や生物学的人間観を根拠に成立している事実を明らかにした。

第三部ではハクスリーのユネスコ観、ユネスコ準備委員会の1947年プログラム起草過程を検証するなかで、ハクスリーの姿勢が独自政策を積極的に実施するというユネスコの基本的性格を決定したこと、さまざまな立場の利害が錯綜する困難な状況でのプログラム案成立の功績が彼の指導力に帰せられるべきことを明らかにした。その教育プログラムの方針や内容が学習者の心身の発達段階や、教育者・学習者・教材といった教育活動の諸要因を十分に考慮したものであるがゆえに教育学的评价に値し、それに進化論的ヒューマンイズムの教育論の影響が認められることも示した。とくに基礎教育では、ユネスコ基礎教育政策の特徴である識字のみに限定されない広範で多様な活動が彼によって決定づけられたことを明確にした。さらに同案の成立プロセスを考察す

るなかで、進化論的ヒューマニズムが大部分の加盟国に受容され、プロトタイプのユネスコ・プログラムが成立した点、彼の見解を反映した基礎教育の方針が確定した点を明確にした。

以上の論述をふまえて、進化論的ヒューマニズムとその教育論が植民地教育への関与の経験を基礎に形成され、それが独自の進化論的・人間主義的見地から、一つの有効な教育的人間像と理想的教育像を提起したと判断した。また著名な教育者の思想の根底にある世界観に強く影響を及ぼすとともに、初期のユネスコ活動やその教育政策の形成と発展に大きく貢献したと断定した。そして進化論的ヒューマニズムとその教育論の思想と実践に、これまで以上の高い評価がなされて然るべきと結論した。

論文審査の結果の要旨

今日、ヒトゲノム・脳科学研究など生命科学の進展に伴い発達や学習のプロセスが科学的に解明されつつあるなかで、これまで人権思想や社会思想から説明されてきた個に応じた発達や学習権の保障について、その内実の科学的根拠を示す研究が求められている。本論文は、個の発達と尊重に対し生物学の観点から根拠を与え、それを進化論によって説き起こした J.S. ハクスリーの進化論的ヒューマニズム教育論の思想と実践を解明するものである。

ハクスリーの進化論は、生物学的観点から進化的進歩の頂点に人類を位置づけ、人類の文化的・社会的営為をも進化という事象に一元的に取り込むところに特色がある。従って、生物学者ハクスリーは、専門以外の多様な分野で独自の理論を展開すると共にユネスコの初代事務局長として文化・教育・科学の実践的な政策に関わったことから、その影響力は多方面に及んでいる。

このような彼の多彩な活動にもかかわらず、これまでのハクスリー研究は、彼がネオ・ダーウィニスト、あるいはネオ・ダーウィニズム的総合説の提唱者として位置づけられるに止まり、その教育論や思想形成、ユネスコ・プログラム作成に関わる実践などについては殆ど解明されてこなかった。

本論文は、ハクスリーの思想形成の過程、生物学的進化論に基づく教育論、その思想のモンテッソーリへの影響、さらにユネスコ・プログラム策定への関与といった4つの課題を設定し、ハクスリーの著作をはじめ生物学・進化思想史、イギリス・アフリカ史、モンテッソーリの著作などの文献とユネスコの議事録などの一次資料の分析を通して、人間諸科学の統合を志向するハクスリーの教育論の全容を追求している。

そして本文においては、第1にハクスリーの思想形成に影響を与えた祖父 T.H. ハクスリーの進化思想を批判的に継受したこと、第2にアフリカ植民地調査において一つの世界社会を築く

上で後進地域開発における識字教育の重要性を認識したこと、第3にモンテッソーリがハクスリーの進化論思想を受容し、子どもの発達を医学的・生物学的・人類学的観点から把握する独自の進化論的人間観を作り上げたこと、第4にユネスコ・プログラムに、ハクスリーの提案した基礎教育政策の方針と内容が取り入れられ、そこには彼のアフリカ経験から得られた人間観・社会観が反映されていることを順次明らかにしながら、進化論的ヒューマニズムの教育論を思想形成から実践に至るまで多面的に吟味し、ハクスリー研究に新たな知見を加えている。

本論文で、ダーウィニズムの古典的進化論が「適者生存」や「生存のための闘争」といった弱肉強食の世界観に対し、ハクスリーは自然選択と突然変異のメカニズムであらゆる進化現象を説明する総合説によって闘争とは相反する平和的な過程として認識したと述べている。しかし進化論とヒューマニズムを如何に矛盾なく結びつけ、整合性ある思想へと発展させたのか、またハクスリーの優生学への関心から個の繁栄と種の持続との関係をどう矛盾なく説明したのか、といった疑問が残る。

この問いに対して、20世紀初頭の自由放任的自由主義から国家の積極的関与による社会改革への転換、さらに労働者階級の政治的台頭と大衆化社会の到来といった時代状況の変化との関わりにおいて、ハクスリーの思想形成を、より精緻に検証することが求められる。このことはさらにはハクスリーが、新時代の世界のリーダーとして未来を託され、ユネスコ事務局長に選出された経緯を説明することにも繋がり、彼の教育論の実践のみならず、国家間での意見集約や軋轢の調停などハクスリーの政治的指導力を評価することになり、より豊饒なハクスリー解釈へと導くことになる。

こうした残された課題はあるが、本論文がハクスリーの進化論の基底を理解する観点に立ち、人類の社会的営みへの進化論的アプローチと生物学的アナロジーの適用を示した進化論的ヒューマニズム教育論の思想と実践を体系的に解き明し、個の発達や尊重に対して科学的根拠を与える教育学研究の新たな可能性を切り開いた業績は高く評価できる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。